

中野香織

「ファッション歳時記」

111

うどん屋はどうやって
国際的ブランドビジネスを
築いたのか



ミキモト真珠島内にある御木本幸吉さんの銅像

みなさんには行動の指針となるロールモデルがいらつしやいますか？ 私にも、岐路に立った時に「この人ならばどう判断するだろう？」とその考え方や発想をお手本にするロールモデルが何人かいます。そのなかでも断然、脳内登場回数が多いヒーローが、御木本幸吉さん（1858～1954）です。

代までの天然真珠・養殖真珠の世界を堪能できるとともに、御木本幸吉記念館では幸吉翁の誕生から天寿をまっとうするまでの96年間をたどることが出来ます。幸吉ファンにとっては最高のテーマパークで、写真をとりに、飽かずパールの芸術作品を眺め、初めて知った事実の数々に感動して、さらなるインスピレーションをいただいで帰ってきました。

養殖真珠という発想そのものが奇想天外だった時代に、それをまったくのゼロから作り上げ、度重なる挫折や数々の障害を乗り越えて日本の真珠を世界ブ

ンドに押し上げた実業家ですが、うどん屋さんの11人兄弟の長男として生まれています。うどんだけでは大きな商売はできぬと悟り、海産物の商売も手掛けるようになるのですが、真珠はほかならぬ海産物の延長なのです。海産物のなかでもっとも利益が大きいのは、偶然に見つかる天然真珠。美しさという普遍的価値が世界で鬩ぐるビジネスになると気づいた幸吉さんは、真珠が貝から生まれる仕組みを徹底的に研究して、真珠を人工的に生み出すシステムを開発していったというわけですが。

幸吉さんから学べる基本の姿勢、第一歩がこの点にあります。ビジネスのヒントやチャンスは、実は自分の日常、足元に転がっているということ。見慣れた世界を、違う視点から見直してみる。その延長にはとんでもないお宝のヒントがあるかもしれない。それに気づけるかどうか、第一歩です。

さらにその気づきをビジネスに移す時に、何度かの失敗も、世間からの嘲笑やバッシングもすべて跳ね返して成功するまでやり続けること。その辛抱強さが第二歩め。幸吉さんのエピソードのなかでも圧倒的に強さを感じさせるのは、真珠裁判です。天然真珠に比べて安価な日本の養殖真珠を業界の脅威としてとらえた

アメリカ、フランス、イギリスが、日本の養殖真珠を締め出すための国際的ないじめを展開しました。でも、御木本さんは7年かけて裁判で闘い、日本の養殖真珠を認めさせることに勝利するのです。

そして、常にユーモアと明るさをたたえていること、という姿勢が第3歩め。日本人は無口でシャイ、と思込まれていた時代に、外国人を笑わせて顧客やビジネスパートナーを獲得していく行動力を見ていると、人が繋がりたいと思う社交性に国境はないことを教えられます。

足元の延長に希望を見出し、内側の情熱を絶やさずに燃やし続けて、後代までも照らし続ける大きな輝きの星になる。木綿の紋付きに山高帽の幸吉さんの輝きは、柔らかで押しつけがないのに、ピュアで強くタイムレス。実に真珠の輝きそのものです。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「『イノベーター』で読むアパレル全史」（日本実業出版社）、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」（吉川弘文館）ほか多数。